

百花繚乱

エネルギーに一言



千歳 敬子

三菱重工株式会社 原子力事業部
炉心・安全技術部

安心を満たすための要件とは

二〇〇年程前、本誌に雑感を書いたことを思い出し、久々に当時の原稿を読み返してみた。好きな番組をビデオテープに録画して深夜に自宅で鑑賞する日々が綴られており、今の生活との差異に愕然とすると同時に、時代の流れを実感した。昨今では、見逃した番組もインターネットで配信されている場合が多く、わが家のビデオデッキは、一〇年以上、稼働することなくTVの下に鎮座している。スマートフォンがあれば、いつでもどこにいても視聴が可能であり、生活も随分と変化した。一方で、携帯電話の充電が日課となり、出張等の移動時には、電源がある場所に吸い寄せられている。街の中を見渡すと、電源とWifiを無料でサービスする場所が増えており、どうやら

同類がいるようだ。

日常生活において、こんなにセントを意識するようになるとは思っていなかったが、IT分野で大きな発展があったこの二〇〇年間で、日本の電力使用量はどのように変化してきたのだろうか。資源エネルギー庁による最終エネルギー消費データで、一九九五年から二〇一五年の変化を調べると、年々増加傾向にあった電力消費量は二〇〇七年、二〇一〇年をピークに、その後は減少を続けている。部門別内訳の家庭部門は、二〇一〇年以降、減少傾向である。一九九五年当時と比べると、一五%程度上回っているが、心配したほどエネルギー消費量は増えていなかった。エネルギー供給側も、ここ数年は同様に減少傾向にある。しかし、

化石エネルギー依存度については、東日本大震災以降、一九七〇年以來となる九〇%超の高水準となっている。オイルショック当時の物不足を体験している人は減りつつあるが、依存度が高いことは不安要素の一つである。化石エネルギー依存度や二酸化炭素排出量の低減に向けて、解決策の一つである原子力発電は、福島事故以降、再稼働反対の意見が多く、プラント再稼働も進んでいない。原子力規制委員会が新たに厳しい基準を定め、審査をしているが、「基準を満足しているも、安心はできない」、「現場で様々な追加安全対策を見て、安全であることは理解できた。でも、安心には繋がらない」、そんな声を街中で耳にする。安全・安心なエネルギーシステムとはどのようなものなのだろうか？そして、誰が供給するべきものなのだろうか？

までの対応ができるのだろうか？雇用者は、「従業員が、「安心して働ける環境を提供する」が、事業者や国が、地域の住民や国民に対して、何をどこまで実施すれば安心を得られるのだろうか？逆に、「国民の不安」を忖度して、過剰な対策が施されてはいないだろうか？

規制機関は、事業者に何を課し、どのように審査・判断したのかを示すことが重要である。その情報に基づいて、私たち市民が、どう感じるかは、個人の権利であり、かつ委ねられた責任でもある。幸いにも多くの審議会はインターネットで公開され、多種多様な情報を、リアルタイムに簡単に入手できる時代になった。意見が溢れる中、それらをただ鵜呑みにするのではなく、時に疑問を呈し、自らの判断を発信できる場所も数多くある。海外の関連情報も容易に閲覧できる。

安全で安心なエネルギーは、待っていて与えられるものではない。エネルギーを利用するために代金を支払い、税金も支払っている私たちは、エネルギー政策のスポンサーでもある。なぜ安心できないのか、どこまでの安心を求めているのか、具体的に示したうえで、事業者や国の活動を注視する時代がやってきた。